ピカソトリガー２　サベージビーチ　*SAVEGE BEACH*

１９８９年アメリカ映画
製作・監督＝アンディ・シダリス
出演＝ドナ・スピアー／
ホープ・マリー・カールトン／
リサ・ロンドン／パティ・デュフェク／
マイケル・ミカサ／マイケル・シェーン

アンディ・シダリスという名をご存じの方は、あまり多くはないと思いますが、「ピカソトリガー・シリーズ」の製作者兼監督と言えば、ああ、そういえば、と思い出される人も多いのではないでしょうか。

小柄なふとっちょ、丸顔の頬に肉をだぶつかせた、見るからに怪しげなギリシャ系アメリカ人は、一九八〇年代から九〇年代前半にかけて多くの女性アクション映画を発表し、一部のマニアの間で一世を風靡しました。

彼の映画には五つの特徴があります。これは彼自身が「売れる映画に必要な要素」として公表しているのですが、曰く。

「大柄で巨乳の金髪女性を出演させる」

「大柄でバズーガを持ったボディビルダーを出演させる」

「ヘリコプターを爆発させる」

「ジープも爆発させる」

「ハワイかラスベガスかダラスでロケする」

個人的には後ろの四つの要素にはなんの魅力も感じませんけれど、要するに、プレイメイトあがりの金髪巨乳美女が、リゾート地を舞台に海を泳いで水着になったりボディビルダーとHするためにに裸になったりさんざんナイスボディを見せつけ、最後にマシンガン抱えて悪人どもをばたばたと退治する、それだけといえば見事なまでにそれだけしかない作品です。

ちなみに、一九八八年の夏のボーナスで初めてビデオデッキを購入し、レンタルビデオ屋で「女性アクションもの」（正確に言えば、女性が男の股間を蹴りあげてくれそうなビデオ）漁りを始めた私が、何本目かに借りたのが、輝かしい「ピカソトリガ・シリーズ」の第一作となった「グラマーエンジェル危機一髪」（１９８６年）でした。

ハワイ諸島のモロカイ島でセスナのパイロットをしている金髪美女、実は麻薬捜査局の捜査員であるドナとタリンが主人公。

ドナを演じるのはプレイメイト出身のドナ・スピアー。ファラ・フォーセットタイプの鮮やかなブロンド、『プレイボーイ』誌の「バスト・オブ・ザ・イヤー」にも輝いたナイスバディ。

彼女とコンビを組むタリンに扮するのはやはりプレイメイトあがりのホープ・マリー・カールトン。ドナ・スピアーに比べて胸は小ぶりですが、愛らしいやや垂れ気味の眼と整った顔だちが魅力的でした。

ワイルドでクールなドナ、ちょっと「ブリッコ（死語）」系のタリンのコンビはなかなか魅力的で、といっても魅力的なのはそのナイスボディだけで、台詞は棒読み、アクションは棒立ち、

わざわざジェット・バスにつかってわざとらしく巨乳を見せつけながら仕事の打合せをやってくれたり、色気のツボだけは外さないのですが、ストーリーはだらだらと退屈で、無意味にスモウレスラーが出てきたり、ヒロインとのHシーンを挿入するだけのために二枚目フットボーラーが出てきたり、最後に犯罪者のアジトを襲撃しておしまいですが、国際的犯罪組織のはずなのにメンバーが五人くらいしかいないのは低予算なんだから仕方がない。とにかく堂々たるZ級映画です。

その後、シダリスは麻薬捜査員に扮したプレイメイト出身女優主演の（これを総称して「ピカソトリガー・シリーズ」というわけです）作品を連発します。「ピカソトリガー」（88年）、「ピカソトリガー2　サベージビーチ」（89年）、「スパイエンジェルス」（90年）、「ボディエンジェルス」（92年）、「グラマラスキラーズ」（92年）、「グラマラスハンターズ」（93年）、「エネミーゴールド」（93年）、「ダラスコネクション」（94年）。今となってはどれがどんなストーリーだったかまったく思い出せないほど同工異曲の――というより、プレイメイトのナイスバディとやたらと炸裂する爆薬以外には何も印象に残らないゴミ金髪巨乳美女アクションビデオです。これがまた、彼の思惑どおり「外国のバイヤーにバカ売れ」したわけです。外国のなかにはもちろん日本も含まれます。

シダリスのHPを見ると、彼の製作作品はすべて日本にも輸入されています。その人気が高かったことは、レンタル開始日に近所のビデオ屋を回っても必ず「貸出中」のカードが無情にぶら

下がっていたという私の経験からも伺えるでしょう。私は執念深く、会社が終わるとまっすぐにレンタルビデオ屋に直行し、「貸出中」のカードがとれる瞬間を待ち構え、やっと借り出せて勇躍下宿に帰り、二時間後には深いため息とともに失望の念を噛みしめたものです。

というのは、このシリーズ、金蹴りが出てくる作品はごくわずか。一作目の「グラマーエンジェル危機一髪」に一度。「ピカソトリガー2　サベージビーチ」に一度だけ。はっきり金蹴りとわかるのは「ピカソトリガー2　サベージビーチ」だけ。

それでも私が「ピカソトリガー・シリーズ」には、他の女性アクション映画にはない魅力を感じるのは、シリーズを一貫して流れる思想蠕蠕はっきり言い切ればアメリカという国家を成り立たせている「理念」が描きこまれているから、もとい、製作者たちの意図とは別のところではからずも表現されているからでした。

「ピカソトリガー・シリーズ」のヒロインたちは麻薬捜査局というアメリカの国家機関に所属している、いわば公務員です。彼女たちが悪人どもと戦うのは、個人的な怨恨や動機があるからではない。それが彼女らの「お仕事」だからです。

多くの人間は、自分たちの「お仕事」の意義など深く考えたりしません。とにかく「お仕事」をちゃんとこなして給料をもらい、空いている時間は楽しみのために使う。

「ピカソトリガー・シリーズ」のヒロインたちも、自分たちの「お仕事」にある種のプライドは

持っているようですが、「お仕事」の意味や自分たちの存在意義については何も考えていません。海があれば水着になり、機関銃があればぶっ放し、いい男がいれば躊躇わずにセックスする。つまり、彼女たちには内面的な葛藤やら苦悩が一切ない。

日本の女性アクション映画を私が好きになれないのは、日本の製作者たちが、ヒロインに何かしらの「情」を仮託してしまう傾向が強いからです。幼い頃に親と生き別れた、恋人に裏切られた、ヤクザにレイプされた、無実の罪で刑務所に入れられた等々。東映の「さそり」シリーズがその典型ですが、彼女らは「男」とか「社会」に対して屈折した怨恨を抱いており、それが格闘というかたちで爆発させる。観客はそのカタルシスに酔わなければならない、そんな前提に立っております。

それはそれで、ひとつの物語としてあっていいわけですが、困るのは主演女優たちに、そのカタルシスを引き出すだけの「演技力」が期待できない、という点です。ヒロインに扮する元歌手や元モデルたちは、たいてい演技力ではなく容姿を買われて出演しているわけで、そこは「ピカソトリガー・シリーズ」のプレイメイトたちと同様ですが、かわいそうに、日本のヒロインたちはできもしない「内面的演技」をシナリオ作家や監督の「独りよがり」によって要求されてしまう。彼女たちは必死に「女の情念」とやらをクールな能面芝居（たんに表情が乏しいだけ）や、眼をやたらと見据えて怖い表情を作ったりする。結果的に、彼女らの持っている本来的な魅力までが否定され、見る側に痛々しい思いをさせるだけという結果になる（ヒロインの内面演技を重

視した場合，女優の力量がいかに大切かは、かつての劇場映画版「さそり」シリーズと、最近、ビデオ映画として何本か作られた「さそり」を比較すれば、分かっていただけるはずです）

アンディ・シダリスの偉さは、「できもしないことはやらない、やらせない」点にあります。なにせプレイメイトあがりです。演技などできるはずがない。だったら演技などさせず、胸を揺らせて走らせたる、とにかく肌を露出させたる、豊満ボディという彼女らが持っている唯一の魅力のみを発揮させる。ストーリーも設定も衣装も、そのためだけに作られるべきである・彼女らは男たちを欲情させるためだけの存在なのだから。

シダリス映画は、つねにからりと晴れ上がった青空の下でロケされます。たまに曇り空があっても、演出上曇った画面でなければならないからではなく、予算の都合でロケの日程を延ばせないからでしょう。そういう屈託のなさ、堂々と開き直った態度、前に挙げた「売れる映画に必要な要素」を照れもせずに堂々と押し出す態度は、たかがＢ級映画にすぎないのに、そこになんとか「監督の意図」「脚本家の訴えたいこと」を込めようとする日本人製作者のいじましさに比べて、よほど「大人」らしい爽快感があります。

むろん、日本の女性アクションものにもそういう作品はなくはない。しかしながら、なぜか日本人の女優が演じると、「ピカソトリガー・シリーズ」の爽快感が感じられない。モンスーン地帯特有のじっとりとした湿気が漂う。なぜか。

答えは簡単です。演じているのが日本人であって、アメリカ人ではないからです。

「ピカソトリガー・シリーズ」の製作期間は、ほぼレーガン～ブッシュの共和党政権時代と重なります。

あの時代、大統領たちは「強いアメリカ」を標榜しました。いつまでもベトナム後遺症に苦しんでいてはならない。正義はアメリカにある。アメリカは軍事でも経済でも世界一のスーパーパワーなのだ。それを証明するためにソ連に軍拡競争を仕掛けて屈伏させ、どう転んでも負けそうもない小国に軍事介入する。この脳天気な「強いアメリカ」は他国の人間にある種の鬱屈した感情を想起させますし、実際、国際政治にとって時には厄介な問題を引き起こします。

私や私と趣味を共有する人々にとって、女性アクション映画とは一種のマゾヒズム的快楽を得るための小道具です。男どもをなぎ倒す女性たちはどこかで堂々としてなければならない。女性の弱さや悩みなど表現してほしくない。なんの疑問も躊躇もなく、男どもを殴りつけ、蹴り飛ばし、射殺してくれなくては困るんです。

その点、「強いアメリカ」「アメリカこそが世界の正義」という後ろ楯を背にしたヒロインは世界最強です。「ピカソトリガー・シリーズ」のヒロインたちが国家公務員であることを思い出してください。一方、彼女らが戦う相手は、ヒスパニックだったりアジア系だったり、「他民族」であることが多い（日本人も含まれます。一度、あの『ベストキッド』のミヤギさんに扮したパ

ット・モリタがアメリカ転覆を狙う黒幕役で出演していて仰天したものです）。

私が「ピカソトリガー・シリーズ」でもっとも好きな作品は「ピカソトリガー2　サベージビーチ」です。

山下奉文将軍が太平洋の孤島に秘匿した財宝をめぐり、アメリカ軍将校、フィリピンの左翼ゲリラ（どう見てもヒスパニック系）、中国系マフィアが三つ巴の争奪合戦を繰り広げ、そこに嵐で不時着したドナとタリンが巻き込まれる。

その島の洞窟には、太平洋戦争当時の元日本兵が潜んでいたりして（三十代の日系人が髪の毛を白くしただけ）、小野田少尉や横井庄一さんの海外での知名度を思わせて感慨深いものもありますが（日本で売るための演出でしょうけど）、発見されればフィリピン国民すべてが幸せになるほどの「財宝」なるものがズタ袋ひとつぶんの金塊だったり、きれいに整備されたリゾート地を絶海の孤島と言い張ったり、相変わらずの低予算ぶりですが、重要なのは、殺されるのは全てアジア人だということです。

シリーズのなかでは貴重な「金蹴り」シーンを見てみましょう。

山下将軍の秘宝を探しにやってきたアメリカ軍将校二人とフィリピン軍人（実は左翼ゲリラ）

が、ドナとタリンに銃をつきつけ、「何者だ」と問いかけます。自分たちはモロカイ航空のパイロットで、この島には嵐で漂着しただけだ、と抗弁するドナたちに対し、偉そうなフィリピン人は「信じられない。こいつらを縛ってしまえ」とアメリカ人たちに要求する。タリンはキュートな笑顔を浮かべて「やってみなさいよ」と、いきなりフィリピン人の股間を蹴りあげて憂さを晴らすわけです。

複数の相手から銃を向けられた状況で相手の股間を蹴るなんて、射殺されたって不思議ではない、いい加減な演出ですが、このフィリピン人は後でタリンに殺され、アメリカ人将校はドナやタリンとカップルになる。

あえて解釈をほどこせば、その底流に感じるのは「人種差別」です。タリンは「世界の警察官」であり「自由世界の正義」を象徴するアメリカの国家公務員なんです。他国人に侮辱をうける謂われはない。金玉のひとつくらい蹴ってやるのは当然です。他のB級アクションもので、グラマラスな美女が「アメリカ人を馬鹿にすると、こうよ！」と叫びながら相手の股間を蹴るシーンがありましたけれど、彼女らの強さの芯にあるのは「私たちはアメリカ人である」というなんの屈折もないプライドなんですね。

だから彼女たちは、男たちを傷つけ、殺すことに快感を覚えているわけでもない。だって彼女らが敵を倒すのは「お仕事」だから。「お仕事」が終われば海で一泳ぎしてリフレッシュしたい

し、いい男とすてきな夜を過ごしたい。それだけの意味で彼女たちは「ふつうの女の子」でしかない。でも、自分たちはアメリカ人であり、正義は自分たちにあることを一点の曇りもなく信じている。

そう、彼女たちは世界最強の「女王様」なんですね。